三菱ガス化学株式会社 「2026 年度 第 2 四半期 決算説明会」 質疑応答要旨

日時　：2026 年 11 月 10 日（火） 17:00 ～ 18:00 （ウェビナー/電話会議）

説明者： 代表取締役社長 ／ 伊佐早 禎則

取締役 専務執行役員　財務経理、CSR・IR 担当 ／ 北川 元康

財務経理部長 ／ 近藤 亨成

（本資料に関する注意事項）

本資料については、上記説明会での質疑応答について、加筆・修正を加え、当社の判断で簡潔に纏めたものであることをご了承ください。また、説明会資料同様、記載されている計画、目標等の将来に関する記述は、説明会当日現在において当社が入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいて判断したものであり、不確実性を内包するものです。実際の業績等は、様々な要因によりこうした将来に関する記述とは大きく異なる可能性があります。

Q1: 機能化学品について上期の状況と下期の見通しを教えてほしい。

A1: 機能化学品の上期実績は、前回予想と比較すると、ポリカーボネートを中心に価格転嫁が進捗し採算が改善した。EL 薬品も好調に推移した他、BT 材料にて価格改定効果が 2Q から発現した。

下期予想としては、エンプラで定期修繕等があり、固定費が増加する見込みである。EL 薬品は韓国拠点で高機能メモリ向けの販売が好調、北米拠点も顧客が回復基調にあり堅調に推移する見込みである。BT 材料は、スマホ向け等の需要低迷を背景に CSP 向けの受注が減少、下期減速を見込んでいる一方、価格改定効果に加え、BGA 基板向けの RS 材について Low CTE ガラスクロスの調達制約も改善傾向にある中、複数顧客による評価が進捗し、期初計画並みの拡販を見込む。

Q2:BT 材料の上振れ要因について、価格改定幅も想定を上回ったのか。また、今後追加の価格改定を行う可能性はあるか。加えて、タイでの生産能力増強について、能力増強の規模や投資額、商業運転開始までの既存設備の供給余力について教えてほしい。

A2: BT 材料の価格改定幅に変更はなく、期初予想通り。価格改定前の受注残の解消が早く進んだことで、価格改定の浸透が前回予想より早まった。また、追加の価格改定は現時点で予定しておらず、まずは既存の価格改定の浸透に注力する。

タイでは、FC-BGA 向けの需要拡大に対応するため、プリプレグの生産能力に加え、出荷時の検査設備も拡充する計画。投資額および能力増強の規模は非開示であるが、能力面では相当程度の余裕を確保できる見込みである。なお、今回の増強は、前回よりも小さな規模となる。2028 年 10 月の商業運転開始までは、先行増強分や白河工場の供給余力を活用して対応可能と想定している。

Q3: ICT3 事業の営業利益について、通期では前回予想比で増益を見込んでいるが、その内訳は。また、下期が上期比で微増益に留まる背景は何か。

A3: 前回予想比において、電子材料および EL 薬品は増益を見込む一方、光学材料は概ね横ばいを予想している。上期下期との比較においても同様の傾向であるが、電子材料、EL 薬品の増益は小幅に留まる見込み。光学材料に関しては、光学樹脂ポリマーの販売は堅調に推移する見通し。一方、眼鏡レンズモノマーは上期のトラブル解消により下期の販売数量は回復する見込みだが、新プラント稼働に伴う減価償却費の増加が利益を押し下げ、上期並みを見込む。

Q4: 光学材料や電子材料においてスマホの生産台数減少の影響は出ているのか。

A4: スマホ市場全体では需要の落ち込みが激しいが、光学材料については、ハイエンド機種での採用が多いため影響は軽微と見ている。一方、BT 材料については、スマホ向け CSP 基板の需要減少の影響を受け始めている。

Q5: 次期中計の施策 1 について、U&P の中に競争力が落ちてきている事業も含まれていると思うが、現中計での4区分と次期中計における4象限では含まれる事業がどのように変わるのか。また、施策 2 については、マーケットアウト型の研究開発を行うために、現在の研究開発活動にどのような課題があり、今後どのような変化が必要と考えているのか。

A5: 次期中計においては、現在の U&P からもう少し絞り込むことを考えている。また、4象限の区分は、事業環境に合わせて資本投下や事業展開を見直す必要があるため、機動的な見直しが必要であると考えている。次期中計は 4 年間を計画しているが、中間地点の 2028 年度末だけでなく、更に短い期間での見直しもあり得ると考えている。研究開発については、従来のプロダクトアウトやマーケットイン型では競合に対して優位性を保つことは難しく、研究については自動化・自立化を進め、研究者や技術者が顧客を訪ね、顧客と共に新しい市場を創っていくマーケットアウト型の研究開発へ変化させていく。

Q6: 現中計でもポリカーボネートの生産拠点の集約やオルソキシレンチェーンからの撤退などのポートフォリオ改革を決断してきたが、次期中計ではもう少し踏み込んだ改革が必要と考えているのか。

A6: 現中計中に決断した施策の中には効果が表れるまで時間を要するものもある。次期中計では、早期に実行できるものと中長期的に取り組むものを見極めながら、着実に変革を進めていきたい。

Q7: 1Q から 2Q にかけて、旧特殊機能材セグメントの売上高の伸びは、BT 材料の値上げの打ち出し幅を考慮すると物足りない印象だが、その背景を教えてほしい。また、下期については、CSP 向けが減少する一方で BGA 向けが増加、プロダクトミックスも改善され、増益が見込まれるのではないか。

A7: 前提として、当社は CSP 向けの販売比率が高く、BGA 向けが中心である他社とは状況が異なると認識している。値上げについては、顧客との交渉の結果、必ずしも打ち出し通りの値上げ幅とならないことを理解いただきたい。BGA 向けについては、売上を昨年度から 10 倍にすべく取り組んでいるが、BT 材料全体に占める割合は低く、CSP 向けの落ち込みを補うまでには至らない。

Q8: BGA 向けの販売はかなりの確度で 3Q から立ち上がるという認識で問題ないか。従来はサプライチェーン上での認証が中々進まない印象であったが、何か進展があったのか。

A8: BGA 向けの販売は四半期毎に徐々に伸びる見込みだが、BT 材料全体に占める割合としては低く、今期業績への寄与は限定的。また、1Q 時点では Low CTE ガラスの調達に苦慮していると説明したが、事業部門の努力もあり、調達や認証が進み、順調に採用いただける見込み。

Q9: 今期営業利益のうち、市況上昇による一時的な利益が在庫影響含め、どの程度生じているのか。また、市況が下落した場合、ROE 悪化が懸念されるが、それを防ぐため自己株式の取得を検討しないのか。

A9: メタノールについては前年同期比での増益のうち、約 3 分の 2 が市況上昇に伴う在庫受払差によるもの。他方、ポリカーボネートやポリアセタールは採算是正も含めて価格改定を行い今期の利益水準となっている。メタノールも含めて、自動的にフォーミュラが組まれているというよりは、厳しい環境の中で顧客に確り製品を供給した上で、理解を得ながら価格改定を進めている。

株主還元については、今期予想の総還元性向が 33%となっており、中長期的に総還元性向 50%を目指す中で今後の検討課題と考えている。

Q10: 持分法利益の通期見通しを大幅に上方修正した背景は何か。また、メタノール事業について、サウジアラビア拠点の稼働見通しをどのように織り込んでいるのか。

A10: 持分法利益の上方修正は、メタノール市況上昇が主な要因。サウジアラビア拠点の稼働については、ホルムズ海峡の封鎖が 12 月まで続き、1 月以降徐々に正常化に向かう前提としている。海上輸送の混乱や冬場の天然ガス供給制約も想定されることから、市況の下落は緩やかになると見込んでいる。

Q11: 現中計では EL 薬品における大型投資の実行と投資回収が、大きなテーマであったと認識している。一部回収の遅れも生じている一方、韓国・北米では投資回収が進んでいるようだが、次期中計では、計画どおり投資成果を刈り取ることができるのか。

A11: 投資回収の遅れは、競合参入によるものではなく、主に顧客の稼働開始の遅れによるもの。回収時期は後ずれしているものの、次期中計では当初想定どおりの投資回収を見込んでいる。

Q12: 次期中計の EL 薬品の取り組みとして、各地域に応じた戦略の見直しを行うとのことであるが、地域別に今までどのような課題があり、今後どのように変えていくつもりなのか。また、収益性・ROIC の改善について、基本的に稼働率が上がることによって利益が上がるのか、それとも投資回収の目線を踏まえて値上げを行っていく戦略なのか。

A12: 特に中国においては競合の参入もあり、戦略の方向性は改めて議論すべきと認識している。稼働率の向上だけでなく、値上げも重要と考えている。価格改定をできる限り進めているが、容易でない部分もあるため、高付加価値品比率を高めていく必要があると考えている。

Q13: 通期の業績予想について、対前回予想では旧機能化学品セグメントの増益幅が最も大きくなっているが、エンプラの価格要因が最も大きなファクターとなっているのか。

A13: 然り。対前回予想ではポリカーボネート事業において原燃料価格高騰を受けて、実施した値上げ後の価格維持を見込む点が、大きな増益要因となっている。その他、エレケミも増益に寄与している。

以 上